

漢文教育序説

国語科教育における漢文は、制度上古典と

いう枠内で、古文と一まとまりに扱われながら、中国文化という特殊性を持つがために、中途半端な存在になりがちである。この状態を乗り越えるためにも、漢文教育観の確立と、それに基づく教材、教材分析、指導法という一貫した提言が望まれてきた。その意味で、本書の出現は待望久しいものである。

長谷川滋成先生が、漢文教育への関心を持たれるようになったきっかけは、一生徒からの「先生、どうして漢文を勉強するのですか。」という質問であった。

中国文学を専攻された先生が、この漢文の授業における生徒の問いかけに、真正面から答えようとした姿勢が、本書を生む原動力となっている。学習者からの視点と、中国文学に対する確かな見識とによって、漢文教育における「実践即研究」の一つのあり方が示されている。

本書の構成は次のようになっている。

- 第一章 漢文教育
 - 第二章 漢 字
 - 第三章 入 門
 - 第四章 思 想
 - 第五章 史 伝
 - 第六章 漢 詩
 - 第七章 文 章
 - 第八章 日本漢文
 - 第九章 漢文教材
 - 第十章 言語教育・文学教育
- 第一章は漢文教育の存在価値について述べられた章であり、第二章は国語国字問題における漢字と、その漢字の指導について書かれた章である。「漢字学習の生活化」で報告されている中学二年生を対象にした「『アッ!』」と思つた漢字」の実践は興味深い試みである。
- 第三章から第八章までは、それぞれの項目

に即して、目標や内容、教材や指導の実態が歴史的観点を踏まえて述べられている。また、それぞれの章には、主題單元による実践の試みも併せ述べられている。具体例として掲げられた教材に対する考察には、長谷川先生の中国文学への造詣の深さがうかがえる。

たとえば、「第五章 史伝」での、「完成期における史伝教材1」では、蘇秦という一人物を扱った「戦国策」・「史記」・「十八史略」という三つの作品の叙べ方を比較検討し、蘇秦のみならず、「史記」の作者司馬遷の生き方にまで言及されている。また、「第六章 漢詩」での、杜甫の「春望」をとりあげて、「わかる」とはどういうことか」を考察した授業実践の報告もその一つである。頷聯「感時花灑涙／恨別鳥驚心」の「別」の生徒の解釈に対し、「管見による限り、この解釈は新しい解釈のように思われるし、充分に説得力のある説のようにも思われる。」として認められている。このような判断が即座にくだせることは、単に中国文学への造詣の問題に止まらず、授業を一時も油断のならない場としていくうえでも大きな意味がある。また、転句に関して、記述はわずかであ

るが卓見がうかがえる。

第九章は、「教材精選の問題」ということが中心に述べられている。「学習者がいかに真剣に、また意欲的に教材に取り組むかは、教材の良否にかかっているのである。」と述べ、その「教材の精選」について、「学習者の実態に即して、指導者みずから年間計画をたて、目標達成のためにきわめて効率のいい教材を選ぶことである。」と考えられている。

第十章は、「漢文教育は、言語教育か文学教育かという択一の教育のあり方を志向するのではなく、両者を総合融合するところにあることを銘記しておかねばならない。」という考えを明確にし、総合融合の方法を、杜甫の「兵車行」と「論語」の例をもって示されている。しかし、総合融合の方法は、この章の三例に限らず、本書全体が示していると見るべきであらう。

長谷川先生の漢文教育、ひいては国語教育に対する真摯で厳しい態度は、随所にうかがうことができるが、「漢詩教材の研究法」として述べられた十四項目もその一端である。特に語釈について、「一語一語、たとえ面倒

であっても、辞書で確かめる。「語釈は、研究の命であり、学習指導のすべてはここにはじまるといっても過言ではない。」と述べられたことは自信にあふれている。

指導者の修養についても、「一朝にして成るものではなく、継続の力しかない」と述べられ、その一つの方法として、「日々の実践研究の営為を記録することである。」と述べられている。本書は、これを実践され続けている先生の結晶の一つといえよう。(A五判四〇七ページ、昭和五四年一〇月一〇日、第一学習社刊 三、五〇〇円) (田中 智生)